

## 一般演題 L 内分泌（甲状腺以外）代謝

### 195. $^{131}\text{I}$ -19-Iodocholesterol による副腎シンチグラフィ

—Conn 症候群を中心にして—

慶応義塾大学 放射線科

久保 敦司 小林 剛 甲田 英一

磯部 義憲 清水 正勝

都立大久保病院 放射線科

木下 文雄

$^{131}\text{I}$ -19-Iodocholesterol の開発により副腎スキャンが広く行なわれるようになってきたが、我々も昭和48年7月より現在までに、臨床症状から Conn 症候群の疑われる症例を中心に、20余例の副腎スキャンを施行した。方法はルゴールにて甲状腺ブロックを行ったのち、 $^{131}\text{I}$ -19-Cholesterol を成人で 1.0~1.2mCi 静注し、原則として8日目にスキャンを行った。

その結果、一側の副腎皮質に著明な集積像を呈した4例（右側3例、左側1例）は手術によりいずれも腺腫の存在が証明された。その内2例は副腎静脈撮影でも副腎皮質腺腫の診断が得られたが、右側腺腫の1例では副腎スキャンでは強い陽性像を得たものの、副腎静脈撮影では腺腫を検出できなかった。本例は手術により右側副腎皮質に 0.9cm×1.2cm×1.2cm の腺腫が証明された。従ってアルドステロン産生の強い腺腫であれば腺腫の大きさが直径 1 cm 程度であっても十分副腎スキャンで描出可能で、時には腺腫の局在診断において副腎静脈撮影より優れていると思われる。

次に、Conn 症候群の疑いが強いにも拘らず、シンチグラム上は明らかな左右差がない症例では副腎皮質両側の過形成（特発性アルドステロン症）が疑われるもののシンチグラムのみでは正常との鑑別はつけがたい。そこで副腎皮質への摂取率を測定し正常との鑑別が可能であるかを検討した。

以上より、副腎スキャンは Conn 症候群における皮質腺腫の局在診断にとって優れた検査法である。ただ副腎皮質過形成の診断には慎重を要する。

### 196. $^{131}\text{I}$ -cholesterol による副腎シンチグラフィ

九州大学 放射線科

鴨井 逸馬 渡辺 克司 川平建治郎

森田 一徳 松浦 啓一

副腎疾患の11例に  $^{131}\text{I}$ -cholesterol による副腎シンチグラフィを行い、組織学的に確診を得た症例について、局在診断能を検討した。さらに、左右副腎への RI の集積状態に関し、定量的評価を試みた。

〔対象および方法〕副腎疾患11例（原発性アルドステロン症3例、クッシング症候群4例、褐色細胞腫1例、その他3例）を対象とし、 $^{131}\text{I}$ -cholesterol 400~900 $\mu\text{Ci}$  静注、注射後4日目より10日目までスキャンニングを行い、8日目に良好なシンチグラムを得、これを判定に用いた。副腎への集積が著明なもの(++)、集積を認めるもの(+), RI の集積を認めないものを(-)とし、両側副腎の描出がある場合は、高い集積側を(++), 対側を(+)とし、陽性像あるいは、より高い集積側を異常と判定した。さらに、Data 処理装置 (TOSBAC 40) を用い、左右副腎への RI 分布を疾患別に集積状態について検討した。

〔結果〕組織学的に確診を得た6例中5例に局在診断が可能であり、 $^{131}\text{I}$ -cholesterol による副腎シンチグラフィが有用である事を認めた。疾患別では、腺腫による原発性アルドステロン症3例全例に患側に高い集積を示し、対側は2例に描出を認め、1例は描出をみなかった。クッシング症候群2例は2例共患側に高い集積を示し、対側は2例共描出されなかった。Data 処理による左右副腎の集積状態の量的評価を試み、原発性アルドステロン症（腺腫例）では、患側：健側・1：1.5、クッシング症候群（腺腫例）ではバックグラウンドの3倍の集積比を示した。